

大学生の課題発見・解決策提案力向上を目的とした 授業デザインの設計～認知症徘徊模擬訓練を通して～

村嶋 琴佳^{*1}, 真嶋 由貴恵^{*1}, 榎田 聖子^{*1}

^{*1} 大阪府立大学 人間社会システム科学研究科

Design of Lessons for University Students Aimed to Improve on Task Discoverability and Solution Proposal Capability

Kotoka Murashima^{*1}, Yukie Majima^{*1}, Seiko Masuda^{*1}

^{*1} Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences,
Osaka Prefecture University

本研究では「認知症」と「徘徊」を題材に、徘徊模擬訓練の体験を通して学生の課題発見・解決策提案力の向上を目的とした授業デザインを設計し、大学生 21 名を対象に授業を実施した。授業デザインの設計にはガニエが提唱する 9 教授事象を参考にし、学生が積極的に議論を行えるようにクリッカーとチャットを導入した。訓練を体験したことにより、その後のグループワークでは「認知症」と「徘徊」が抱える課題について、多角的な視点から解決策の提案があり、授業後に実施したアンケートでは、訓練を体験したことで認知症高齢者の立場に立つことができたという意見や、チャットを使うことで情報共有が簡単に出来たという意見が得られた。一方、訓練の内容が容易だったため、実際の行方不明者捜索のような複雑さを再現できるように検索範囲や行方不明者役の配置に工夫が必要であることがわかった。今後はアンケートで得られた意見を基に内容を改善していきたい。

キーワード: 課題発見力, 解決策提案力, 認知症, 徘徊模擬訓練

1. はじめに

1.1 大学生と社会問題

近年の日本の社会を取り巻く問題は、人口減少や少子高齢化だけでなく、貧困格差の拡大、地方の過疎化、人間関係の希薄化など多種多様である。これらの問題は、大学の授業で取り上げられたり、就職活動の面接において質問されたりするため、知識として知っている大学生は多い。しかし、言葉の意味が分かり他者に説明は出来ても、どこに課題が潜んでおり、どのような解決策が必要なのかを具体的に議論できる学生は少ない。道田⁴⁾が大学 1 年生 40 名と 4 年生 40 名を対象に大学生の批判的思考力に関して行った調査によると、日常的題材に対して批判的思考を示した学生は全体の 36.7%に留まり、多くの大学生が論理的思考に欠け、題

材の内容や自分の持つ信念に基づいて情報を取捨選択していることが分かった。このことから大学生が社会問題について議論するためには、まず問題の背景を知り、身近に感じる事が重要である。そこで本研究では、大学生が当事者意識を持つことが難しい社会問題を題材にした体験学習を通して、積極的に発言をし、課題発見・解決策提案力を養う授業デザインの設計を目的とする。

1.2 テーマ設定

本研究では、「認知症」と「徘徊模擬訓練」をテーマとして設定した。その理由は次の 2 点である。

まず、「大学などの高等教育機関において認知症啓発授業が行われた実績が少ない」という点である。平成 27 年に国が発表した「認知症施策推進総合戦略（新オ

レンジプラン)⁽²⁾」では、主な政策の一つとして「認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進」が挙げられている。全国キャラバン・メイト連絡協議会が集計した結果⁽³⁾を見ると、各地で開催されている認知症啓発講座のうち、教育機関で開催された数は全体の25.1%を占めており、その中でも小学校での開催が全体の42%と最も多く、次いで中学校が35%、高校が11%となっている。一方、大学で開催された講座は全体の6%に留まっており、高等教育機関における認知症教育がかなり遅れていることが伺える。

2つ目の理由として「一般大学生向けの認知症サポーター養成講座の数が限られている」という点が挙げられる。大学で行われる認知症サポーター養成講座は主に医療・看護・福祉系の学生を対象としている大学が多く、一般の学生を対象にした講座は少ない。さらに、地域社会における人間関係の希薄化や核家族化が進む現代では、大学生などの若者が高齢者と交流する機会是非常に少なく、大学生が「認知症」や「徘徊」を自分の住む地域や家族など身近に起こりうる問題として捉えることは難しい。

以上より「認知症」と「徘徊模擬訓練」を題材にした体験型授業デザイン考案し、O大学学生を対象に実施した。

2. 徘徊模擬訓練とは

徘徊模擬訓練とは、認知症高齢者が徘徊により行方不明になった場合を想定した捜索訓練である。警察庁が平成30年6月に発表した調査結果⁽⁴⁾によると、平成29年に行方不明者として届け出が受理された数は84,850人に上り、そのうち認知症またはその疑いがある人は15,863人と全体の約18.7%を占めることが明らかにされている。このような背景から、徘徊模擬訓練を実施する自治体が全国的に増えている。自治体によって訓練の規模や内容は異なるが、我々が平成30年3月に参加した鹿児島県肝付町における徘徊模擬訓練では、企業・警察・消防の協力の下、県外からの参加者を含め、総勢約100名が訓練に参加し、行方不明者役4名の捜索にあたった。この訓練では、「徘徊には目的がある」という点に焦点が置かれており、行方不明者役はそれぞれの目的に沿って徘徊していた。そのた

め行方不明者役を発見した際、単純に連れて帰ろうとすると抵抗されるため、目的に沿った声かけや誘導方法を考える必要があった。また、フジクラやNTTドコモなど4社が共同開発した「位置情報取得専用IoTシューズ」の実証実験も兼ねており、シューズを行方不明者役に装着させ、捜索役がその位置情報を専用アプリで取得しながら捜索にあたった⁽⁵⁾。この実験から、行方不明者を捜索する際には、捜索者全員が情報を共有できるツールが必要であると感じた。本研究では、このとき体験した内容を参考にし、徘徊に目的があることに焦点を置くことや、行方不明者の役割、情報共有ツールの使用など、授業内で実施する訓練内容を計画した。

3. 研究方法

3.1 授業方法

本研究では、「認知症」と「徘徊」を題材に、徘徊模擬訓練の体験を通して課題の発見と解決策の提案を行う力を養うことを目的とし、授業実践を行った。受講生に必要な前提知識として、「認知症」について知っており、他者に説明できることと、「徘徊には目的がある」ことを理解していることが挙げられる。しかし、本授業では医療・看護を専門としない一般の大学生を対象にしているため、学習者の前提知識を統一させる工夫が必要である。そこで、本授業が行われる4週間前の通常授業において認知症と徘徊に関する事前授業を実施し、その後確認テストを行っている。これにより、学習者が持つ既存知識の差異によって授業中に実施する徘徊模擬訓練やグループワークに支障が出ないようにした。

3.1.1 授業目標

本研究の学習目標を以下の通り設定した。

『徘徊模擬訓練を通して、認知症高齢者とその家族を支えるために必要な支援策について議論し、情報通信技術を駆使した地域サービスを提案できる力を養う。』

3.1.2 授業計画

授業の全体概要と時間配分を表2に示す。授業計画を作成するにあたり、授業構成のために段階的に考えられた理論である「ガニエの9教授事象⁽⁶⁾」(表1)を参考にした(表2)。

表 1. ガニエの 9 教授事象

1	学習者の注意喚起	6	練習の機会を設ける
2	学習目標を知らせる	7	フィードバックする
3	前提条件を確認する	8	学習の成果を評価
4	新しい事項の提示	9	保持と転移を高める
5	学習の指針を与える		

表 2. ガニエの 9 教授事象に基づいた授業計画

ガニエの 9 教授事象		授業計画内容
1	学習者の注意喚起	事前授業に基づいた質問と発話
2	学習目標を知らせる	授業目標と授業の流れを提示
3	前提条件を確認する	事前授業スライドの提示
4	新しい事項の提示	徘徊模擬訓練の例の紹介
5	学習の指針を与える	今回の徘徊模擬訓練の説明
6	練習の機会を設ける	徘徊模擬訓練実施
7	フィードバックする	徘徊理由提示 徘徊高齢者役の感想
8	学習の成果を評価	新しいシステムの提案
9	保持と転移を高める	ポートフォリオ テスト(後日)

各内容における授業形態と使用するツール、所要時間は表 3 の通りである。

表 3. 授業計画案

授業形態	授業計画内容	ツール	時間(分)
講義	事前授業に基づいた質問と発話	スライド クリッカー	5
	授業目標と授業の流れを提示		5
	事前授業スライドの提示		5
	徘徊模擬訓練の例の紹介		5
	今回の徘徊模擬訓練の説明		10
実践	徘徊模擬訓練実施	チャット	30
講義	徘徊理由提示 徘徊高齢者役の感想	スライド	5
演習	新しいシステムの提案	グループワーク チャット	20
内省	ポートフォリオ テスト(後日)	—	—

次に、ガニエの 9 教授事象に沿って考えた各項目に

ついて詳細を説明する。

- 事前授業に基づいた質問と発話：「認知症」や「徘徊」と身近なかかわりとの乖離を認識してもらうために、既習済みの認知症に関する授業の内容に基づき、「祖父母に会う頻度」や「認知症を患っている人は身近にいるか」など簡単な質問を行った。
- 授業目標と授業の流れを提示：本授業で達成すべき目標についてスライドを用いて提示した。
- 事前授業スライドの提示：前提条件を確認するために、クリッカーを用いて学生に質問しながら事前授業で学習したことを復習した。
- 徘徊模擬訓練の例の紹介：我々が体験した訓練の紹介を交えながら、全国各地で行われている徘徊模擬訓練について説明した。
- 今回の徘徊模擬訓練の説明：授業で行う徘徊模擬訓練のルールと諸注意について説明した。
- 徘徊模擬訓練実施：徘徊高齢者役の学生 2 名を発見し、教室まで連れて帰って来てもらうこととした。制限時間は 30 分間、訓練中の情報共有ツールとして前述のチャットツールを使用した。
- 徘徊理由提示、徘徊高齢者役の感想：訓練終了後、徘徊高齢者役がなぜ徘徊していたのか理由をスライド資料で提示し、「徘徊には目的がある」ということの理解を促進させた。さらに徘徊高齢者役より、訓練中に感じたことを発表してもらうことにより、学生の徘徊高齢者役に対する対応方法について、どのような声かけが徘徊高齢者役を教室に連れて帰るきっかけになったのかフィードバックした。
- 新しいシステムの提案：訓練から学んだことをまとめ、評価するために、授業目標に掲げていた「認知症高齢者とその家族に必要な支援策」について各グループで討論し、その結果を発表した。グループ発表の際にはチャットを使用し、学生の発言をリアルタイムで全員が共有できるようにした。
- ポートフォリオ、テスト：最後に授業を振り返るポートフォリオの記入を行った。さらに約一ヵ月半後、「認知症」や「徘徊」に関する内容を踏まえたテストを行うことにより、知識の保持と転移を促

進させた。

3.1.3 授業で使ったツール

学生が積極的に授業に参加し、より活発な議論を促すためのツールとして、クリッカーとチャットシステムを導入した。クリッカーを活用する利点として、匿名で回答が出来る点と、結果を即時にフィードバックすることができる点が挙げられる。鈴木ら⁽⁶⁾の報告でも、クリッカーにより、学生の授業に対する能動性が非常に高まることが明らかにされている。そこで本研究においても、学生の能動性を高めるためにクリッカーを全員に配布し、学生に向けた質問やアンケートを実施し、その結果をプロジェクターで共有できるようにし、全体の意見を可視化した。

一方、チャットを導入する利点は、情報共有が容易にできる点と、他者の意見に即座に反応できる点である。しかし、畠中ら⁽⁷⁾の研究によると、チャットを授業に導入する際は、講義と並行すると学生が十分に講義内容を理解できない可能性があることと、全員にパソコンを配布するなど環境を整備する必要があることが指摘されている。そこで本研究では、パソコンやタブレット、スマートフォンからアクセス可能である無料の URL 発行型チャットシステム「Feeder」(<https://www.x-feeder.info/>)(図 1)を導入し、学生間で使用環境の差異が発生しないようにした。さらにチャットの使用を、徘徊模擬訓練を実施している時とグループワーク後の発表を行う時のみに限定し、学生が講義内容を理解する際の妨げにならないよう配慮した。尚、訓練中の使用については周囲の安全に配慮するよう口頭で注意を促した。

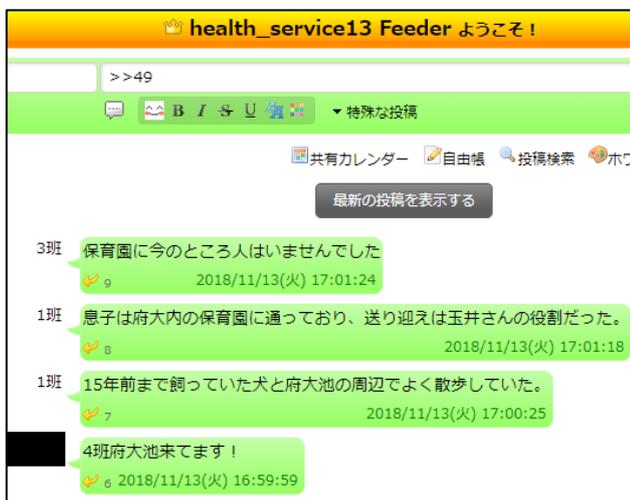


図 1. チャットシステムの様子

3.1.4 徘徊模擬訓練

本研究で実施した徘徊模擬訓練は以下のルールに則って実施した(表 4)。

表 4. 授業で実施した徘徊模擬訓練のルール

内容
1. 2名の行方不明者を指定した範囲内で探す。
2. 学生は4チームに分かれ、2チームは行方不明者の家族チーム、残りは地域住民チームとする。
3. 行方不明者の特徴と写真を記載した『行方不明者情報カード』を用意し、家族チームにのみ伝える。
4. 情報の共有や行方不明者を発見した際はチャットを使用する。
5. 行方不明者役は認知症高齢者になりきり、明確な目的を持って指定範囲を徘徊すること。

今回行う徘徊模擬訓練では、学生を5~6名の4グループに分け、さらに地域住民チームと行方不明者の家族チームとして役割を与え、検索対象者を指定した(表 5)。尚、グループを分ける際、事前授業後に実施したテストの結果を基準に学生を分けることによって、学生が持つ知識や経験の違いによるグループ間の差異が発生しないように配慮した。

表 5. 各グループの詳細

班	役割	検索対象者	徘徊理由
1	家族チーム	行方不明者 1	飼っていた犬を探していた
2	地域住民チーム		
3	家族チーム	行方不明者 2	会社に出勤しようとしていた
4	地域住民チーム		

また、1班と3班には、家族しか知り得ない情報として行方不明者の写真が貼付された資料を配布した(表 6)。

表 6. 行方不明者の情報(一部抜粋)

行方不明者 1	行方不明者 2
<ul style="list-style-type: none"> 息子は大学内の保育園に通い、送り迎えは行方不明者 1 の役割だった。 15 年前まで飼っていた犬と O 大学の周辺でよく散歩していた。 	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後は O 大学の生協で店長をしていた。 若い頃は、春になると必ず妻と娘の 3 人で大学周辺で花見をしていた。

このように行方不明者によって学生を 2 つに分け、各チームが持つ情報に差異を付けることで、検索する

際に情報の共有が必要になり、より活発なコミュニケーションが生まれると考えた。さらに、徘徊高齢者の多くが明確な目的(以前飼っていた猫がいなくなったから探す, など)を持って徘徊することがほとんどのケースであり⁹⁾, 行方不明者を検索する際には家族からの情報提供は非常に有力な手がかりになることから, このような工夫によって訓練が現実的になると考えた。

3.2 対象者と評価について

- ① 対象者: 本授業は, O 大学所属の 2 回生以上 21 名 (男性: 15 名, 女性: 6 名)を対象に, 「ヘルスケアサービス」という授業の中で実施した(図 2)。この授業では, 保健・医療・福祉に関する基礎知識を学習し, これらの分野が抱える諸問題について, 「情報技術」という観点からどのような解決策が必要か考えることを目指している。受講生は主に情報系学部所属の学生が多く, 他に経済系学部や環境系学部の学生もおり, 医療や看護を専門としない一般の学生が対象となっている。
- ② 評価方法: 授業評価はアンケート調査とチャットの利用状況を用いて評価する。アンケートは無記名自記式調査用紙を用いて授業開始前と授業終了後に実施した。学生には, 本アンケートは研究目的で実施し, 成績には影響が無いこと, 結果を学会等で報告することがあることを口頭で説明し, 自由意思での提出を依頼した。尚, この研究に先立って研究者の所属する大学の倫理委員会の承認を得ている。



図 2. 授業の様子

4. 結果

4.1 アンケート結果

本研究では, 授業開始前(事前)と授業終了後(事後)の 2 回アンケートを実施した。各アンケートの質問項目は表 3 と表 4 の通りである。

表 3. 事前アンケート

		①	②	③	④
1	祖父母に会う頻度について教えてください	(同居) 毎日	程度 週 1 回	程度 月 1 回	ほとんど会わない
2	家族・親戚や知り合いに認知症を患っている人はいますか	いる	いない	わからない	—
3	自分が住む地域で徘徊による行方不明者が発生した場合, 検索に参加したいと思えますか	ぜひ参加したい	少し参加したい	あまり参加したくない	全く参加したくない
4	自分の家族が徘徊により行方不明となった場合, 誰に協力してほしいと思えますか	地域の住民	自分の友達	親戚	誰にも協力してほしいくない
5	徘徊模擬訓練を知っていますか	知っています	知らない	—	—
6	徘徊模擬訓練に参加したことがありますか	ある	無い	—	—
7	認知症サポーターや徘徊模擬訓練といった認知症に関する活動について興味はありますか	とても興味があります	少し興味があります	あまり興味無い	全く興味無い

表 4. 事後アンケート

		①	②	③	④
1	自分が住んでいる地域で徘徊による行方不明者が発生した場合、捜索に参加したいと思いますか	ぜひ参加したい	少し参加したい	あまり参加したくない	全く参加したくない
2	自分の家族が徘徊により行方不明となった場合、誰に協力してほしいと思いますか	地域の住民	自分の友達	親戚	誰にも協力してほしいくない
3	認知症サポーターや徘徊模擬訓練といった認知症に関する活動について興味はありますか	とても興味がある	少し興味がある	あまり興味無い	全く興味が無い
4	本日の授業で使用したチャットツールは使いやすかったですか	とても使いやすかった	少し使いやすかった	少し使った辛かった	とても使った辛かった

4.1.1 事前アンケートの結果

祖父母に会う頻度について最も多かった回答は「④ほとんど会わない(14名)」, 次いで「①毎日(同居している)(3名)」と「②週1回程度(3名)」, 「③月1回程度(1名)」となった。また、認知症高齢者が身近にいるかという質問に対し、2名が「①いる」と回答し、それ以外の学生は「②いない(18名)」あるいは「③わからない(1名)」を選択した。さらに、徘徊による行方不明者が発生した場合、捜索に参加意欲を示した学生は、「①ぜひ参加したいと思う」が0名、「②少し参加したいと思う」が7名という結果に対し、「③あまり参加したくない」または「④全く参加したくない」を選んだ学生が14名に上り、多くの学生が消極的であることが分かった。さらに、「徘徊模擬訓練」を知っている学生は0名となり、「認知症」や「徘徊模擬訓練」が学生にとって実際に身の回りで起こっている問題として感じられるテーマではないことがわかった。加えて、認知症に関する活動に参加意欲を示した学生は「①とても興味がある」が0名、「②少し興味がある」が7名という結果に対し、「③あまり興味が無い(10名)」または「④全く興味が無い(4名)」を選んだ学生が14名

に上り、多くの学生が認知症啓発活動に無関心であることが分かった。

4.1.2 事後アンケートの結果

事後アンケートの質問1「徘徊による行方不明者が発生した場合、捜索に参加したいと思いますか」について、事前アンケートと比較した結果を図5に示す。事後アンケートでは質問に対し「①ぜひ参加したいと思う(3名)」と「②少し参加したいと思う(14名)」が合計17名となり、事前アンケートの結果で参加したいと答えた学生が7名だったのに比べ、捜索に参加意欲を示した学生が2倍になり、訓練を体験することで、認知症や徘徊に対する学生の意識が変化し、当事者として取り組むべき問題と言う認識が広がったことがわかった。

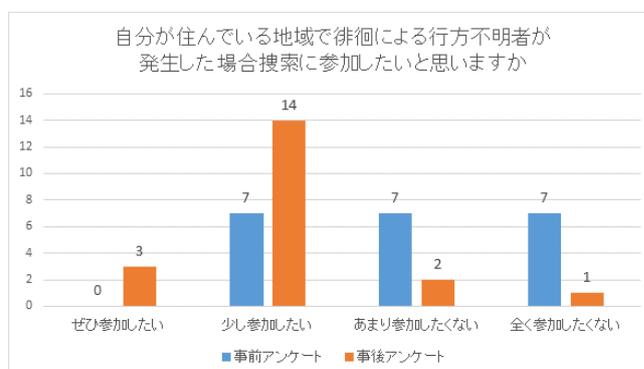


図 5. 事前・事後アンケート比較結果(質問 1)

次に、事後アンケートの質問2「自分の家族が徘徊により行方不明となった場合、誰に協力してほしいと思いますか」について、事前アンケートと比較した結果を図6に示す。事前アンケートでは「③親戚」が最も多い10名となっていたが、事後アンケートでは「①地域の住民」が最も多い15名に変化しており、訓練を通して地域との繋がりが捜索に重要であるという認識が広まったことがわかった。

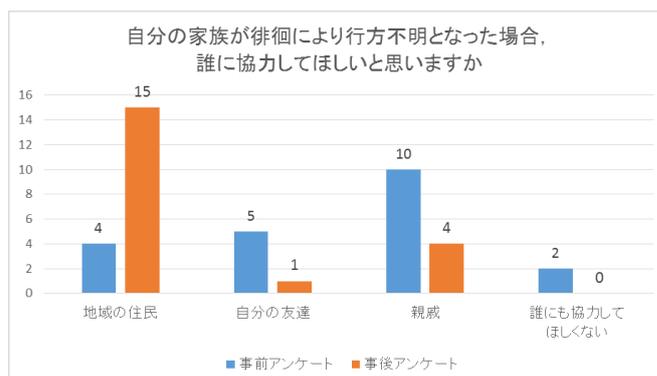


図 6. 事前・事後アンケートの比較結果(質問 2)

さらに、事後アンケートの質問 3「認知症サポーターや徘徊模擬訓練といった認知症に関する活動について興味はありますか」について、事前アンケートと比較した結果が図 7 である。事後アンケートでは「①とても興味がある(2名)」または「②少し興味がある(12名)」が合計 14 名となり、事前アンケートでは興味があると答えた学生が 7 名だったのに比べ、認知症に関する活動に興味を示した学生が 2 倍に増加したことが分かった(図 7)。

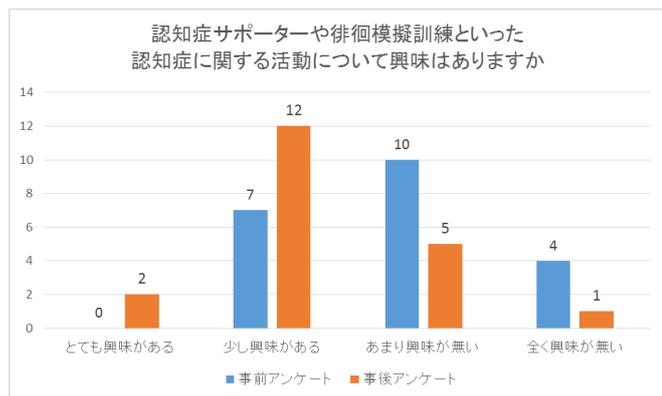


図 7. 事前・事後アンケートの比較結果(質問 3)

事後アンケートに設けた授業に関する自由記述欄には、「実際に訓練を体験することで身近な人が認知症になっても対応しやすくなる感じた」という意見や「徘徊者を見つけるだけでなく、見つけた後のコミュニケーションにも焦点が置かれていたのでとても現実味があった。」という意見などが寄せられた。しかし、「訓練で想定された内容と現実には差があるのではないか」や「すぐに見つかったので意味が無いと思った」といった意見もあり、訓練内容をより現実的かつ複雑な内容にする必要があることがわかった。

4.2 チャットの利用状況

本授業では、チャットの使用を徘徊模擬訓練の時とグループワークの時に限定して学生に取組んでもらった。事後アンケートのチャットに関する自由記述欄には、チャットの使用について「スマートフォンで簡単にアクセスできる」や「意見がすぐに反映される」、「情報を共有することが出来てよかった」といった肯定的な意見が寄せられた一方で、「読み込み速度が遅い」や「入力欄の位置が上部にあり分かり辛かった」といった意見があり、システムやデザインについて改善が必要であることがわかった。

次に各場面におけるチャットの利用状況について説明する。

4.2.1 徘徊模擬訓練におけるチャット

徘徊模擬訓練を実施している間は、各チームとも「行方不明者の情報を教えてほしい」といった投稿や、「生協近くを探しています」など、情報の交換が活発に行われていた(図 3)。その結果、行方不明者 1 は検索開始から 10 分、行方不明者 2 は検索開始から 15 分で発見に至った。しかし 4 班が行方不明者を発見した際、行方不明者が徘徊に至った目的が達成されていないことから帰るのを抵抗したため、学生間で声かけの内容に工夫が必要であるという認識が広まり、チャットで「何か良い声かけの内容はないか」といった質問が投げかけられた(図 8)。その後、合流した 2 班のメンバーが機転を利かせた声かけを行ったことで教室に連れて帰ることに成功した。



図 8. 訓練中のチャットの様子

4.2.2 グループワークにおけるチャット

訓練終了後、訓練を通して感じたことや分かったことをグループで共有し、「認知症高齢者とその家族を支えるために必要な地域サービスとは？」という議題についてグループワークを行ってもらった。各グループが発表した地域サービスは表 7 の通りとなった。

表 7. 各グループの発表内容

班	提案内容
1班	認知高齢者向け VR サービス
2班	(i) 地域掲示板 (ii) 位置情報取得可能なワッペンを服に貼り付ける
3班	高齢者がよく集まるイベントの開催
4班	GPS を利用した情報共有アプリ

1 班は、認知症高齢者が徘徊する際に目的があることに着目し、VR 技術を活用して認知症高齢者が仮想空間内で目的を達成することにより満足感を向上させ、徘徊を減らすという内容だった。この提案に対し、他の学生からはチャットを通じて「VR を装着する際は同居者など必ず誰かが見ている必要がある」といった意見や「VR 機器を装着している感触が無い機器が必要だ」といった意見が投稿された。一方、2 班と 4 班が提案した位置情報の活用については、「位置情報を活用するという価値観を高齢者に広められたら GPS も抵抗がないのでは」といった意見が投稿された。このように、訓練中はチャットを情報共有として活用されていたが、グループワークでは意見を投稿し議論する場として活用されたことがわかった。

5. まとめ

本研究の目的は、「認知症」と「徘徊」を題材に、徘徊模擬訓練の体験を通して、積極的に発言をし、課題発見・解決策提案力を養う授業デザイン的设计である。チャットの利用状況を分析すると、授業にチャットを導入することにより、情報共有として活用するだけでなく、他者の意見に即時に反応できることから、活発な議論につながれたことがわかった。またアンケート結果から、実際に徘徊模擬訓練を授業内で行うことで、認知症患者やその家族の立場に立って課題を考えることができたことが伺える。さらに訓練後のグループワークの結果からは、グループによって課題の認識と解決策に違いが生まれ、多角的な視点から「認知症」と「徘徊」というテーマに取組めたことが推察される。このことから、特定の社会問題を題材にした課題の発見と解決策の提案力を養うための授業を行う際は、実際にその問題を体験できるような機会を設け、どこに課題が潜んでいるのか自ら発見させることが重要であることがわかった。一方で、訓練内容について「現実と差があると思う」といった意見や「すぐに見つかったので意味が無いと思った」といった意見があり、実際の行方不明者捜索のような複雑さを再現できるように捜索範囲や行方不明者役の配置を工夫する必要がある。またチャットについても、情報を共有できるという利点がある一方、学生が不便を感じず授業に集中で

きるようにデザインや読み込み速度に配慮する必要があることが分かった。今後はアンケートで得られた意見を踏まえて内容を改善していきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP16K12355 の一部の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) 道田泰司, :” 日常的題材に対する大学生の批判的思考—態度と能力の学年差と専攻差—”, 教育心理学研究, Vol.49, pp.41-49(2001)
- (2) 厚生労働省: “認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)”, <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html>(2018年11月26日確認)
- (3) 全国キャラバン・メイト連絡協議会: “認知症サポーターの養成状況”, <http://www.caravanmate.com/result/>(2018年11月26日確認)
- (4) 警察庁生活安全局生活安全企画課: “平成28年における行方不明者の状況”, <https://www.npa.go.jp/news/release/2018/20180613001.html> (2018年11月26日確認)
- (5) 日経デジタルヘルス(平成30年3月29日), <https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/PPP/news/032900679/> (2018年11月26日確認)
- (6) 鈴木 久男, 武貞 正樹 他: “授業応答システム“クリッカー”による能動的学習授業: 北大物理教育での1年間の実践報告”, 高等教育ジャーナル:高等教育と生涯学習, Vol.16, pp.1-17(2008)
- (7) 畠中 晃弘, 百合山 まどか 他: “講義におけるチャットを利用したコミュニケーション促進の実験”, 情報処理学会研究報告グループウェアとネットワークサービス, Vol.45, pp. 61-66(2000)
- (8) 稲垣 亘, 鈴木 克明: “教師のためのインストラクショナルデザイン 授業設計マニュアル Ver.2”, 北大路書房 (2015)
- (9) 数井 裕光, 杉山 博通, 坂東 潮子: “認知症知って安心! 症状別対応ガイド”, メディカルレビュー社(2012)